教育実践研究　第29集（2019）97－102

［生　活］

児童の「見方・考え方」の育成を目指した学習活動の工夫

－１年生生活科「みにぶたさんとなかよし」の実践を通して－

石野　　亨*

１　問題と目的

今回の学習指導要領改訂において，生活科の教科目標に「具体的な活動や体験を通して，身近な生活に関わる見方・考え方を生かし」とある。資質・能力の向上に重要な役割を果たすのが「見方・考え方」である。生活科における「見方・考え方」は，生活科学習指導要領解説において，「身近な生活に関わる見方・考え方であり，それは身近な人々，社会及び自然を自分との関わりで捉え，よりよい生活に向けて思いや願いを実現しようとすることである[1)]」とある。生活科の学びの中で，対象とのかかわりとこれまでの生活経験を結び付けて考えることで，児童一人一人がもつ多様な視点から対象を捉え，試行することができる。

この「見方・考え方」の育成について，久利は，「子供が「やってみたい」「してみたい」と自分の思いや願いをもち，具体的な活動や体験を行い，直接対象と関わる中で感じたり考えたりしたことを表現し，行為していくプロセスの中で身に付いていくものである[2)]」と述べている。「見方・考え方」を育むための前提として，体験活動の充実は不可欠である。活動が充実することで，児童の気付きや考えが生まれ，それを表現したいという願いが生まれるだろう。他者に自分の気付きや考えを伝えたいと考えた際，どのように表現すれば自分の思いが伝わるか，自己を見つめる時間を設定することが大切である。児童の生活経験を背景に対象とのかかわりを振り返ることで，自己との関係に気付いたり，別の対象との共通性に気付いたりすることができると考える。

生活科では，振り返り活動として，言葉などにより表現する活動が位置付けられている。しかし，気付いたことや考えたことを分かりやすく，具体的に表現することは低学年の児童には難しい。その一因として，語彙や言葉による表現活動の少なさがあると考える。野島は，「１年生にとって有意義な表現活動にするために国語との関連をどう図っていくかが課題である[3)]」と述べている。自分の担任する１年生の実態からも，体験活動の中で見付けたことや考えたことを振り返ると，「たのしかった。」「きれいだった。」など短い言葉でしか表現できない姿が見られる。個人差や発達段階の違いはあるが，児童は幼児期に遊びを通して様々なことを学び，一人一人の生活経験は豊富である。体験活動の中で児童に話しかけると，嬉しそうに見付けたことや感じたことを話してくれる。「見方・考え方」を生かして生活経験から生まれる言葉を使って表現できるようにする。そのために，国語科との関連を図りながら考えや気付きを表現する活動を充実させる必要がある。体験活動と表現活動を一体として行うことで，児童が自分の気付きや考えを自分の言葉で表現できる力が育まれる。

児童が思考し，表現する力を高めるには，児童が意欲的に考えようとする学習活動となるよう，工夫することが重要である。「見方・考え方」を育む活動として，生活科学習指導要領解説では，「中でも，言葉などによる表現と関わりが深いのは，たとえる学習活動である」としている。「体験したことをこれまでの体験につなげて表現する」ことで，「それまでの気付きと関連付けが図られた，より確かなものになっている[4)]」とある。体験活動の中での児童の気付きや考えを，生活経験と結び付けて考える活動を行うことで，対象と児童自身とのかかわりを見つめ直し，気付きの質が高まるだろう。また，国語科との関連を図りながら表現活動を行うことで，自己の気付きを確かにし，児童の言葉で表現する力が育つだろう。「たとえる学習活動」「生活経験と結び付ける」を行うことで，児童の思考力が高まり，「見方・考え方」が育成されるのではないだろうか。そして，児童の表現力が高めていくには，どのように国語科と関連させた学習活動を仕組んでいけばよいだろうか。

そこで，本研究では，体験活動を通して気付いたことを国語科と関連させて表現する活動を行うことにより，児童の「見方・考え方」が育成されるか，実践を基に考察していくことを目的とする。第１学年のミニブタの動物飼育における体験活動の実践において，児童が書いた振り返りシートの内容を分析し，気付きの内容がどのように変化していったかについて考察する。

*上越市立柿崎小学校

2　研究の方法

第１学年（男子12名，女子10名）に対して，生活科の動物飼育活動「みにぶたさんとなかよし」を実践した。実施時期は，平成30年７月から11月までである。また，国語科の学習単元「わたしのはっけん」を９月に実践し，ミニブタの観察活動を行った。児童の「見方・考え方」を育むために，この２つの学習活動を関連させ，体験活動と表現活動を一体的に行うことが重要であると考え，次のような手立てを講じた。その際の児童の姿を実際の言動や振り返りシートの記述をもとに分析する。

(1)　「なかよしシート」の活用

ミニブタとのかかわりを通して気付いたり考えたりしたことを振り返る場面を意図的に設定する。「わたしのはっけん」と関連させ，児童が見付けたことを整理して記録しやすいようにシートの内容を工夫する。

(2)　気付きを「たとえる」活動の設定

児童が見付けたことを振り返りシートに書き表すと，「～がありました。」や「かわいかったです。」といった平易な表現になることが多い。児童が気付きや考えに対する具体的なイメージをもって振り返ることが大切である。そこで，児童が見付けたことを「たとえる」活動を設定することで，児童の思考を促し，イメージを確かなものとさせる。児童の経験から想起させたりすることで，児童の内面から生まれる言葉で表現できるよう働きかける。また，ミニブタと自分のイメージが似ているか確かめようとかかわることで，ミニブタとのかかわりを深め，児童の気付きの質を高めていく。

(3)　「見方・考え方」を共有するための発表し合う場の設定

児童が見付け，考えたことを互いに話し合ったり，全体で発表し合ったりする時間を設定する。互いに伝え合う場を設定することで，分かりやすく表現しようと相手意識をもって考えることができる。また，観察の視点や表現を全体で共有することで，児童一人一人の「見方・考え方」を全体に広げることができる。他者の気付きを知ることで自分も見付けたいという思いをもたせ，新たな気付きを見付けようとする意欲を高められるようにする。

3　国語科「わたしのはっけん」との関連付け

国語科「わたしのはっけん」の単元目標と評価規準は以下の通りである。

（１）単元の目標
○　身の回りのものを観察し，見つけたことが伝わるような文章を書くことができる。
（２）単元の評価規準
○　見つけたことに関心をもち，分かりやすく書こうとしている。【関心・意欲・態度】
○　様子などが伝わるようにシートに書き出し，それをもとに語と語や文と文との続き方に気を付けて文章を書くとともに，文章を読み返したり感想を伝え合ったりすることができる。【書く】
○　句読点の打ち方や主述の関係に気を付けたり，敬体で書くことを理解したりすることができる。【伝統的言語文化と国語の特質に関する事項】

本単元は生活科との関連付けがしやすく，児童にとっても自分たちで育てている動植物を観察することで，関心をもって学習に取り組むことができる。また，形や大きさ，数といった視点をもって観察させることで，児童にとっての気付きが生まれやすい。生活科，国語科の両者にとってとても重要な単元である。

本研究において，国語科の学習内容と生活科としての動物の飼育活動を関連させた点は，次の２点である。

(1)　見付けたことに関心をもって表現する

作文用紙の使い方や文章に書き表す順序といった内容の分かりやすさは，国語科の技能として国語科の時間に学習する。生活科の学習として，「見つけたことに関心をもち」，気付きや考えを自分なりの言葉で表現したいという意欲を重視する。

(2)　様子などが伝わるように表現する

視点をもって観察することで，対象についての気付きが生まれやすくなっている。その児童の気付きを高められるよう，「様子などが伝わる」ように，気付いたことを「たとえる」活動を取り入れる。そのために，生活科の学習として対象とじっくりかかわり，その中でどんなものと似ているか比べたり探したりすることで，児童の思考力，表現力を高めていく。

児童が「たとえ」を使って表現できるよう，体験活動の前と表現活動の後に国語科の学習活動を設定する。体験活動前の学習では，「たとえ」を使った表現の知り，よさに気付くことをねらって行う。表現活動後の学習では，対象に関する気付きをもとに，「たとえ」を使って表現する学習を学級で行う。この国語科の学習は毎回行うのではなく，体験活動，表現活動の前後に１回ずつ行う。繰り返し行うのではなく，対象とのかかわりの中で表現する力を育んでいく。

4　活動の実際

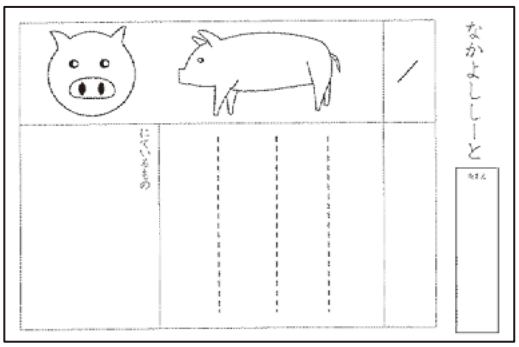
(1)　「なかよしシート」を基にした振り返り

①　なかよしシート

７月２日に３匹のミニブタを迎え，動物の飼育活動が始まった。児童がどんな動物を飼いたいか話し合い，ミニブタを飼うと決めてから準備を重ね，待ちに待ったミニブタとの対面だった。３匹のミニブタの見た目はほとんど同じである。顔や体にある黒色のシミや模様，またエサの食べ方や行動など，違いを見分けるのは難しかった。ミニブタとの触れ合いの後に振り返りを行っても，「かわいかった」「えさをたべていた」という記述が多く，児童の気付きが感じられるものは少なかった。

そうした児童がミニブタそれぞれに愛着をもってかかわり，そこでの気付きを表現するためには，対象に興味，関心もってかかわろうとする活動を設定することが必要である。児童が「もっとよく見てみよう」「調べてみよう」と進んでかかわるためにどう意欲付けていくかが大切だと考えた。

〈図１　なかよしシート〉



そこで，ミニブタにかかわる時間を設定し，「なかよしシート」を書くことにした。時間は国語や生活科の時間を使い，外に出られる日はできるだけ毎日出かけ，児童がじっくりかかわることができるようにした。なかよしシートには，ミニブタとかかわったことで感じたことや，ミニブタの様子をよく見て気付いたことを記録する。書くのが苦手な児童に対し，ミニブタのイラストを付けたり，言葉を書くスペースを小さくしたりした。シート全体を完成させるのではなく，児童の気付きを記録するためのシートとして使い，進んで書こうという意欲を高めることをねらった。児童は，ミニブタにエサをやったり，体を撫でてあげたり，思い思いのやり方でミニブタと触れ合った。その中で，エサを食べる様子をじっと見つめたり，ミニブタの体の下をのぞき込んだりしながら，ミニブタをこれまで以上にじっと見る様子が見られた。なかよしシートには，ミニブタの体の色を塗ったり，ミニブタの様子や体の部位を選んで見付けたことを書いたりしていた。

〈写真１　耳に落ち葉を近づける児童〉

また，シートの中に「にているもの」のスペースをつくり，見付けたことに似ているものを考える活動を意図的に設けた。児童の生活経験を振り返って考えたり，校地内を探して葉や石，学用品と比べたりしながら，自分の気付きの様子が伝わるように具体的に表現しようとした。児童は，自分の考えたものが本当に似ているのか，ミニブタの耳や体に具体物を近づけてみたり，改めてじっとミニブタを見て考えたりしていた。

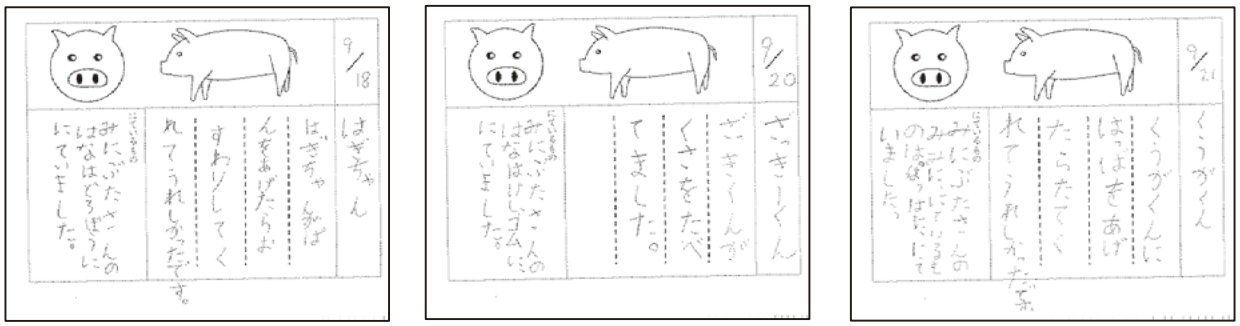
ミニブタとのかかわり後には，絵日記の振り返りシートを使って振り返る時間を設定した。「わたしのはっけん」の学習で，大きさや形を「～みたい」という言葉を使って表現することを学習した。その表現を使い，見付けたものを似ているものにたとえて表現した。なかよしシートは，絵日記を書く際にどんなことを見付け，考えたのかを振り返るツールとして活用した。あまり文章を書けない児童も，なかよしシートを見て思い出したり，記録してあることをそのまま書き出したりすることで，振り返り活動で文字や言葉で表現することへの抵抗感を少なくすることができた。

②　Ａ児の振り返りシートから

Ａ児はミニブタ当番の仕事を進んで行うなど，飼育活動にまじめに取り組む姿が見られる。しかし，ミニブタに触ったり，積極的にかかわったりすることは少ない。振り返りシートや日記を書くことは好きであるが，気付きの質の高まりはあまり見られない。振り返りシートを書く活動では，「～がたのしかったです。」といった短い文をつなげて書くことができるが，内容を詳しく書くことが少ない。

「わたしのはっけん」の学習が始まり，３匹のミニブタの区別がつくか児童に問いかけた。Ａ児は他の児童と同じく，見分けやすいメスの１匹は分かるが，残りのオス２匹の見分けが付かなかった。しかし，なかよしシートを使った活動が始まると，Ａ児は３匹が見分けられるようになりたいと考え，３匹のミニブタのどこが違うかじっくり調べ始めた。「わたしのはっけん」の視点に合わせて，色や大きさ，動きをよく観察した。ミニブタに近づいてかかわることが少なかったＡ児だったが，ミニブタの違いを見付けようとそばまで寄って調べる様子が見られた。なかよしシートは１枚に１匹のことしか書けないため，１回の活動で１匹のことを書き，３枚のなかよしシートを書いた。図２は，Ａ児のなかよしシートをまとめたものである。

〈図２　Ａ児のなかよしシート〉



９月18日，最初にＡ児は，特徴の分かりやすいメスのミニブタの「はぎちゃん」を観察することにした。メスのミニブタは３匹の中ではあまりおすわりをすることがない。それがこの日はパンをあげたらおすわりをしてくれたことで，Ａ児はそのことをなかよしシートの記述欄に印象的に記録した。その後Ａ児は，メスのミニブタの顔の観察を始めた。メスのミニブタの特徴は鼻の周りに付いている黒色の模様である。Ａ児はその特徴に似ているものを探し，アニメで見かける泥棒の口の周りがひげで黒くなっていることを思い出した。そこからＡ児は，メスのミニブタの似ているものを「みにぶたさんのはなはどろぼうににていました。」と記録した。Ａ児はこの日の振り返りシートに下のように記述した。

９月18日火曜日
　はぎちゃんにぱんをあげたらおすわりをしてくれてうれしかったです。さんかくおすわりみたいにおすわりをしていました。かわいかったです。くうがくんも，ざっきーくんもしてくれました。はぎちゃんのはなはどろぼうのひげにににていました。おもしろかったです。

Ａ児は始めにメスのミニブタがおすわりをしてくれたことを記述した。おすわりの様子が分かりやすく伝えられるように，「さんかくおすわりみたいに」というたとえを使って表現した。また，顔を観察して気付いたことを「どろぼうのひげにににていました。」と記述した。「ひげ」という言葉を使い，なかよしシートの内容をより詳しく表現することができた。

９月20日，Ａ児は２匹のオスのうち，体が少し小さくておとなしい「ざっきーくん」を観察した。オスのミニブタはメスのミニブタのように目立つ特徴はない。そこで，Ａ児は「わたしのはっけん」で学習した視点を生かし，具体物を使って調べることにした。自分の周りにあるものをいろいろ試し，Ａ児は自分の消しゴムが小さいオスのミニブタの鼻の穴と似ていることを見付けた。なかよしシートには鼻の大きさのことを記録したが，振り返りシートには他の気付きについても記述した。

９月20日木曜日
　ざっきーくんがくさをたべていました。ざっきーくんのはなは，けしゴムにににていました。ざっきーくんのからだは，たんけんバッグにににていました。ざっきーくんのしっぽは，へびにににていました。

「たんけんバッグにににていました。」という記述があるように，Ａ児は探検バッグを使って体の大きさを比べ，小さいオスのミニブタの方が近いと気付いたことが分かる。また，しっぽを観察することで，しっぽの揺れる様子を「へびにににていました。」と表現した。複数の視点からミニブタの様子を捉え，ミニブタに対する気付きの質が高まったと考える

９月21日，Ａ児は最後に大きいオスのミニブタ「くうがくん」を観察した。Ａ児はエサをやるなど自分からかかわるようになってきた。なかよしシートには，自分のあげたエサを食べてくれた喜びを「たべてくれてうれしかった」と記録した。特徴は，前日と同じく具体物を使って調べた。しかし，思うように似ているものが見つからなかったＡ児は，飼育小屋から離れた場所に具体物を探しに行った。そこで，大きいオスのミニブタの耳に似ているものを見付け，なかよしシートに「はっぱにににていました。」と記録した。振り返りシートにはＡ児が見付けた葉が記述されていた。

９月21日金曜日
　くうがくんにはっぱをあげたらたべてくれてうれしかったです。くうがくんのみみは，あさがおのはっぱにににていました。くうがくんのしっぽは，うなぎきにににていました。なかよくなってうれしかったです。

Ａ児は，耳の大きさに似ているものを探す中で，自分の育てているアサガオのことを思い出したと考えられる。アサガオの観察とミニブタの耳の大きさを調べる活動が結び付くことで生まれた気付きである。生活経験を想起することでＡ児の思考が促され，気付きを具体的に表現することができた。また，「なかよくなってうれしかった」という記述から，少しずつ３匹のことが分かるようになり，かかわることの楽しさを喜ぶＡ児の気持ちを読み取ることができる。

(2)　「なかよしシート」を活用した交流

①　「見方・考え方」の共有をねらった友達とのかかわり

児童一人一人が「なかよしシート」に書く活動と合わせて，新たな気付きが生まれるよう，「なかよしシート」に記録したことを共有する場面を設定した。

ミニブタとのかかわり後，振り返りシートに書く活動の前になかよしシートを友達と発表し合うようにした。児童によって活動の進度に違いがあるため，一斉ではなく，なかよしシートが終わった児童から数人で交流する。特に「にているもの」を紹介し合い，自分の考え付かなかった気付きやたとえを共有させる。それにより，書くことが苦手な児童も，友達の分かりやすい表現を取り入れて振り返りシートに書くことができるようにした。

〈写真２　友達と発表し合う児童〉

また，時間のあるときには，一人一人の気付きを学級全体で振り返る時間を設定し，「見方・考え方」の共有を図った。「わたしのはっけん」の学習と関連させ，児童はミニブタの体の部位や動きをたとえを使って発表し合う。児童の生活経験により近いたとえほど，学級全体の共感が大きかった。全体で共有することで，「見付けられなかったから昼休みに見に行こう」など，自分も見付けたいという思いが生まれ，ミニブタをより深く知ろうとする児童の姿が見られた。

②　Ｂ児の振り返りシートから

学級全体で振り返る中で，ミニブタの耳について発表する児童が多かった。見た目にも大きく，鼻よりも形や動きがはっきりとしていて，１年生にとって観察しやすいからである。そこで，ミニブタの耳に視点を絞って何にたとえたかを発表する場面をつくった。発表では，どんなところが似ているか，理由も合わせて発表するようにした。

・ミニブタの耳は，葉っぱぐらいの大きさです。
・ミニブタの耳は葉っぱみたいな形です。耳の先のところが葉っぱの形に似ているから。
・ハートに似ています。まるいところととんがっているところが似ているから。
・ちょうちょに似ています。羽の形に似ているから。

始めは，調べたり比べたりしやすい形や大きさについてのたとえが出てきた。形については，耳の先のとがった特徴のある部分に着目し，「葉っぱ」「ハート」を使ったたとえが出てきた。他にも，児童の身近にある「せんべい」「手の平」といった平らなものでたとえられた。形から想像するたとえが終わると，耳の動きに着目したたとえが出てきた。

・羽に似ています。羽みたいに動いているから。
・うちわに似ています。パタパタあおいでいるみたいだから。

「ちょうちょ」とミニブタの耳を結び付けて考えることで，ミニブタの耳も「羽」と同じように動いていることに気付いた児童が出てきた。その動きから，「うちわ」のようにあおぐ動きでたとえる児童も出てきた。

そこからＢ児は，「ミニブタさんが耳で飛んでいるみたい」と発表した。他の児童も「本当だね」「パタパタ動いててダンボみたい」と飛んでいる様子を思い浮かべ，ミニブタの耳のイメージを共有することができた。

翌日のＢ児のなかよしシートには，次のように書かれていた。

９月20日金曜日
　はぎちゃんがくさのねっこをたべていました。もぐらみたいにつちをほっていました。どろんこであそんでいました。ममはちょうちょみたいでした。とんでいるみたいでした。しっぽがわたあめににていました。

Ｂ児は，なかよしシートにメスのミニブタを選んで観察し，複数の視点から見付けたことをなかよしシートに記録した。その中には，前日に全体で共有した耳の動きについて書かれている。ミニブタの耳の動きを発表し合い，もう一度自分で確かめたいという思いからこの記述が生まれたと考える。Ｂ児は実際に耳の様子を観察し，ちょうちょに似ていると改めて実感をもった。そして，その動きがちょうちょの羽が動いているようであると捉え，「とんでいるみたい」と表現した。「耳で飛んでいるみたい」という発表は，友達からの共感が大きいものだった。他者からの肯定的な評価を受けることで，Ｂ児にとって自分の気付きがより確かなものとなり，気付きの質を高めることにつながった。また，Ｂ児はミニブタが穴を掘って草の根を食べている様子を「もぐらみたい」，しっぽの先の毛の様子を「わたあめににていました」とたとえを使って表現している。気付きの質を高めながら，気付きや考えを相手に分かりやすく伝えようと表現しようと工夫する様子が感じられる。

5　考察

(1)　「たとえる」活動を通して，「見方・考え方」の育成につながった

Ａ児とＢ児のなかよしシートの記録を見ると，ミニブタの様子を分かりやすく伝えられるよう表現を工夫していることが分かる。「わたしのはっけん」の学習と関連させ，対象を「形」「大きさ」「動き」といった視点から捉えることで，様々な気付きが生まれていった。そして，その様子を「たとえる」活動を設定することで，対象に対する考えを深め，新たな気付きを生み出すことにつながった。「たとえる」活動を通して，児童の「見方・考え方」を育み，気付きの質を高めることができた。

また，振り返りシートには，「なかよしシート」の内容も含めて自分が書きたいと思うことを自由に書かせるようにした。Ａ児の振り返りシートを見ると，「なかよしシート」に記録したことだけでなく，振り返る中で考えたことが振り返りシートに書かれている。A児は，「なかよしシート」を見ながらミニブタとのかかわりを振り返り，その中で自分が特に伝えたいと考えたことを振り返りシートに書いたのだと考える。国語科の学習として「たとえ」を使って振り返らせると，確かに「～みたい」という表現技能は身に付くだろう。しかし，表現するための活動では，児童の意欲的な活動は生まれない。見付けたことに関心をもち，気付きを表現したいという思いをもって活動できるために，国語科と生活科と関連させた活動を取り入れることが大切である。対象への思考と自己の気付きの表現を繰り返すことで，児童の表現力を高めることにつながっていくだろう。

(2)　生活経験と結び付けて思考することで，気付きの質が高まった

Ａ児はミニブタの耳の形に似ているものを探す中で，自分の育てるアサガオの観察と結び付くことで，Ａ児の気付きの質が高まった。対象に対する気付きと児童一人一人の生活経験と結び付けて考えることで新たな気付きが生まれ，気付きの質を高めることにつながる。また，気付きを「たとえる」ことで，気付きを具体的に表現することができ，自己の気付きを確かなものとすることができる。しかし，葉や石といった具体物と違い，生活経験はいわば形のないものである。そのため，生活経験と結び付けるためには，経験一つ一つが児童にとってしっかり意識されたものでなければならない。特に，他の体験活動や学習活動と結び付けるには，それぞれの活動の充実や振り返り活動での気付きの意識化が大切である。Ａ児は普段のアサガオの世話を忘れずに行い，９月に入ってから種取りを頻繁に行っていた。その経験がＡ児の気付きにつながったのだと考える。「見方・考え方」を育むために児童の経験を豊かなものとし，確かな気付きをもたせることで，新たな活動での気付きの質を高めることにもつながる。

(3)　気付きを共有することで，「見方・考え方」の育成につながった

Ｂ児は友達の発表を聞くことで新たな気付きが生まれ，ミニブタの耳の動きを「ミニブタが耳で飛んでいるみたい」と表現することができた。気付きを全体で共有することで，一人の気付きが全員の気付きとなり，他の児童の新たな気付きの視点となる。新たな視点は次の活動への意欲となり，対象とのかかわりを深める。また，新たな視点をもつことで対象とのかかわりが変化し，新たな「見方・考え方」で対象を捉えることにつながるだろう。しかし，１年生では発表したいという思いが強く，友達の発表を聞くことへの意識はまだ低い。気付きを共有し，新たな視点とするために，共有場面での教師の働きかけが重要である。児童の気付きを分かりやすくまとめることで，新たな視点をもち次の活動の意欲につなげることができるだろう。

6　課題

本研究では，体験活動を通して気付いたことを国語科「わたしのはっけん」と関連させ，「たとえる」活動を意図的に設定した。それにより，「見方・考え方」を育み，児童の表現力を高めることができた。この「わたしのはっけん」以外にも，国語科やその他の教科に生活科と関連させることで児童の資質・能力を高められる学習活動が多くある。また，生活科学習指導要領解説には「たとえる」だけでなく「試す」「見通す」「工夫する」といった多様な学習活動が示されている。児童の資質・能力を育成するために，生活科と他教科の学習活動をどのように関連させるか，実践を重ねることが課題である。

引用・参考文献

１）文部科学省　『小学校学習指導要領解説　生活編』，東洋館出版社，2017，pp.10-11

２）久利知光　「新学習指導要領と授業づくりのポイント　生活「主体的・対話的な深い学び」を実現する生活科の授業づくり」『授業力＆学級経営力９月号』，明治図書出版株式会社，2017，p.89

３）野島聡子　「自分自身への気付きを自覚する表現活動の在り方に関する一考察　－第１学年「やぎさん　だいすき」の実践を通して－，『教育実践研究 第24集』，上越教育大学学校教育実践研究センター，2014，p.133

４）文部科学省　前掲，p.97